ハロウィンの日に

どり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハロウィンの日に

【Ｎコード】
Ｎ１９０２Ｙ

【作者名】
どり

【あらすじ】
ハロウィンの夜。会社のみんなはパーティだのって賑やかにやっているのに、あたしは部屋で一人きり。
でも、その時、後頭部に喰らった一発！振り返れば、少女。いったいこれは何事？

（前書き）

思い立ったが吉日的に書きました。短期集中型なので、いろいろ読みにくい点とかあるかと思います。指摘いただければ、有り難いです。

1．ハロウィンの夜に

後頭部に衝撃が走った。
気が遠くなるというのは、ドラマや小説ではよくあるけど、実際に経験したのは初めてだった。
それくらい、頭がクラクラした。
なんとか、気を取り戻すと、振り返る。そこには中学生か高校生ぐらいの女の子が立っていた。
よくあるような制服に長めのスカート。でもなにより印象的だったのは、ちょっとつり上がり気味の目。
性格もきつそうな感じ。あまりお近づきになりたくない雰囲気。

でも、見たことない子だ。
しかもここはあたしの部屋だ。
あたしはジンジンする頭を抑えながら、言った。
「お前、誰だ？」
『あたしはあたしだ』
はあ、左様でございますか。これは手強そうだな、と思った。

あたしの名前は蝮部（たちひべ）　仁美（ひとみ）。
なかなか読める人はいないかも知れないけど、”まむしべ”じゃないぞ。
古里じゃそれなりにみんな、読めた名字だったんだけどね。
うん、あたしはその田舎からこっちにやってきて就職。
それから月日は流れて、言いたくないけど、もうすぐ３０才。
……明日。明日がその誕生日。１１月１日。残り、数時間であたしはめでたく、３０才。

って、めでたくないよお！三十路だよお！
２０代のうちに結婚する予定だったのに、もう、どう考えたって、無理だよなあ。
　といっても、容姿端麗、才色兼備のあたしのこと。
多少は予定オーバーしても、必ずや目標達成は果たしてみせる！
　でも、実は根本的なところに欠点があって……実は子供が嫌い。
男は欲しいけど、子供は苦手なんだよね。なんでだかよくわかんないけど。
まじめにお付き合いしましょうと言う人にはこれ、言えなくて、
そのうちに交際が自然消滅してしまう。

　そして今日は１０月３１日の金曜日。夜の１０時。世の中はハロウィン（Ｈａｌｌｏｗｅｅｎ，Ｈａｌｌｏｗｅｅｎ）。
うちの会社のこの独身寮でも、ハロウィンパーティだ週末だって、みんな浮かれて出払って誰もいないはず。
　あたしは誰かと出かける予定もなく、部屋でぼんやり過ごしていただけ。
いや、２０代最後の夜を一人で名残惜しんでいたということにしておいて。
それなのに、見知らぬ女の子が、あたしの部屋にいる？あたしをぶん殴る？どういう訳だ？

「もう一度、お伺いさせていただきますが、あなたはどなた様で、どうしてあたしの部屋にいらっしゃいますのかしら？」
　社長の娘とか専務の愛人とかだとまずいので、一応丁寧に聞いてみた。
『あたしはあたし。あたしの居たいところにいるの。それが悪いか』
「悪いも何もねえ、ここはあたしの部屋なんだよ。他人が居る所じゃない！」
『悪戯か奢りか（Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ）』

はあ？なんですか、それは。
『おばさんはハロウィンも知らないんだねえ』
「う、う、うるさい！そんなことぐらい知ってるわよ。じゃなくて、あたしはおばさんじゃない。
まだおばさんじゃない！出てけ、あたしの部屋から出てけ！」
あたしは立ち上がって、窓の外を指さす。外はもう真っ暗だったけど、そんなことはどうでもいい。
『３０のおばさんが現実逃避しても可愛くないよ。事実は事実でしょ』
わかっている。わかっているだけにイヤだ。さらに、それを他人に指摘されたら嬉しくないことも確かだ。
「やかましい！人が気にしていることを言うんじゃない！用は何だ？ないんなら出てけ！」
『ない訳じゃないけど、言えない』
ちょっと馬鹿にしているような響きがあって、ますます頭に来た。
「いい加減にしなさいよね。年下だと思って甘くしてたらつけ上がって。力づくでも追い出すわよ」
『無理』
「何で無理なのよ」
『だってあたし、幽霊だもん』

あたしはポカンと口を開けた。
自己申告型幽霊？そんなもん、あるんかいな？
あたしは手を伸ばして、彼女に触ってみた。
布地の感触。体温だって、息づかいだってある。
「うそだあ。だってあたし、あんたに触ってるよ」
『だって実体化していないと、しゃべることも見ることも叩くこともできないじゃん』
「そうか……って、全然説明になってない。幽霊だなんて、ウソじゃん！」

『でも、本当だもん。本人が言ってるんだから。どうしたら信じてくれるかな？』
なんか、相手の調子に乗っているような気がしたけど、一応考えてみた。
「例えば、消えてみるとか、壁ヌケしてみるとか。でも、手品でもできそうだよね。
Ｍｒ．マリックだったら出来ちゃうかも知れない。引田天功だったら間違いないよね。
デビッド・カッパーフィールドってのもいたよね。懐かしいなあ。
あ、手品師の話じゃなくて、幽霊の証明ってことだっけ」
『……よかった。戻ってきてくれて。壁ヌケしてもいいけど、それで信じてくれる？』
その質問にあたしはクビを横に振った。二人、顔を見合わせてため息をつく。
『じゃあさ、とりあえず半透明になるから、あたしの手を取ってみて』
言われるまま、あたしは彼女の手を取った。
白くて細い、いかにも女性らしい腕。あたしのたくましい腕と比べてちょっとはうらやましいぞ。
『いくよ』
その声と共に、肌色が薄く透けた。手の向こう側にあって見えないはずのあたしの指が見えている。
どう考えたって、これは透けている。あたしは彼女の顔を見た。
笑みを浮かべている彼女の、向こう側の壁が見える。
これは手品だって、言い張ろうと思ったけど、急に膝が震えだした。
鳥肌が立つ。
これは……本物の幽霊かも。
そう思ったとき、あたしは絶叫と共に気を失った。
ドンドンと激しくドアが叩かれる音にあたしは目覚めた。

必死に床を這いずっていくと、手を伸ばしてドアの鍵を開けた。
勢いよく扉が開かれて、外の人物が飛び込んできた。
緑色の顔、黒いマント。とんがり帽子にマスク。
今度は魔法使いか、妖怪だ！そう思ったあたしは再び絶叫した。
「先輩、落ち着いてください！僕です。向かいの一（にのまえ）です」
そう魔法使いが言った。魔法使いは向かいの一君なのか、一君は魔法使いだったのか。
ああ、ダメだ。あたしは混乱してる。
魔法使いは帽子とマスクを取った。きちんと整髪した頭。目の周りは緑が塗り残されている。
よかった。普通の人間だ、あたしは安堵した。
「先輩、どうしたんですか。恐ろしく響く絶叫ですよ。ここでもハロウィンパーティやってるんですか」
「違うの、出てきたのはハロウィンの妖怪じゃなくて、幽霊」
「はあ、幽霊ですか？夏でもないのに」

一君はあたしの指さすまま、部屋に入っていった。見回すと戻ってくる。
「誰もいませんよ。幽霊らしいものもありませんけど」
そんなはずはない、とあたしも部屋に入った。
あたしのベッドの上にはあの少女が腰掛けている。
「そこ、そのベッドの上にいるじゃない」
「ベッドの上ですか？」
一君は少女と顔を突き合わすぐらいにそばに立つけど、彼女には気がつかないみたい。
あ、そうか。一君には彼女がまったく見えないんだ。ようやくあたしは理解した。
『そう、あたしは見えない人には見えないし、聞こえない人には聞こえないんだよ』
彼女が言った言葉も、一君には聞こえてないようだ。

よく見れば、腰掛けているはずのベッドも少しも凹んでいない。
あたしは彼女が幽霊であることに、１００％納得した。
これだけ冷静になれたのは、多分、一君が側にいてくれたからだろう。
一君はベッドに腰掛けて、そう、幽霊の真横に座ってこっちを見ている。
彼女は指で一君に悪戯しているけど、まったく感じていないようだ。
そんな二人を見ていると、笑いがこみ上げてきて、あたしはすっかり恐怖から解放されてしまった。

「で、先輩、幽霊ってのは何だったんですか？」
「その話はいいわ。あたしの見間違いってことで。一君はどうしたの？その格好は」
一君は立ち上がって、自分の姿をあたしに見せている。よく見れば、帽子と顔とマスク以外は普通のスーツ姿。
「ハロウィンパーティに行った帰りだったんですよ。仲間は二次会に出かけたんですが、僕は帰ってきた途端に先輩の絶叫が聞こえてきて」
『ふうん、こんなおじさんでもハロウィンパーティなんだ』
「おじさんは失礼でしょ。まだ若いわよ」
「ええ、僕はまだ２３ですから、若いですよ」
『それでも悪戯か奢りかってお菓子もらったりするのかなあ？』
「そんなに若くもないわよ。それは子供でしょ」
「先輩、僕のこと、若いとか若くないとか子供とか、なんが言いたいでしょう？」
うええ、会話が成立してない。彼女の言葉は一君には聞こえてないから、一君には意味が通じてない。

このままにしておいても、あたしも一君も混乱するだけ。とりあえず少女は無視。

「えっとね、一君は幽霊とかは見ない人なんだ」
「全く信じてませんよ。そんなもの。見えない物がいるはずはないんです」
　ベー。少女があかんべしている。その姿がおかしくて、あたしはクスリと笑った。
「あたしもついさっきまでそう思ってたんだけどね、急に見えるようになっちゃって。
今も君の側に見えるんだけど」
　あたしの言葉に、一君はキョロキョロ見回すけど、当然見えるはずもない。
「で、あんたはどうしたいのよ」
「え、別に先輩をどうこうしたいとは思ってなかったですけど」
『訳あってここに出てきた以上は訳が消えるまではいるつもり』
「ってことは、ずーっとこのままいるの！？」
「いませんよ。先輩が落ち着いたら自分の部屋に帰りますよ」
『どこにもいかないわ。行けないもの。あんたのそばにいるしかないの』
「側にいるなんて、とんでもない！２４時間あんたを連れていろってこと？」
「いえ、そんな、僕たち、まだそんな関係じゃないですよ。先輩、気が早いんですね」
　こ、こいつは……。あたしは握りしめた拳を必死で押さえ込んだ。意外に一の奴、こういう気持ちがあったのか。
いや、こいつを殴ったところで、この少女の件は片付かない。
「わかった。まず片づけられることから片づけよう。落ち着いたから、一君、部屋に帰ってよし。ＯＫ？」
「ＯＫ」
　一君はそう言うと立ち上がった。見下ろされるぐらいに長身だった。
「で、先輩、幽霊はどうするんです？」

一の奴、笑いながら聞いてきた。こいつ、絶対にあたしの言うこと、信じてないな。
「あたしの側にいるっていうから、ま、一緒にでも寝るわよ」
「せ、先輩。その幽霊って、まさか、男じゃないでしょうね？」
こいつ、いったい何の心配をしてるんだ？
あたしは一君を部屋から押し出した。ドアの鍵をかける。
なんだか疲れ切って、ベッドに倒れ込む。
手を伸ばして、明かりを消した。
急に出現した暗闇の中で淡い光（Ｗｉｌｌ　ｏ'　ｔｈｅ　ｗｉｓｐ）が見えたような気がした。
だけど、あたしは気にすることなく眠りの中に落ちていった。

２．万聖節の日（Ａｌｌ　Ｓａｉｎｔｓ'　Ｄａｙ，Ａｌｌ　Ｈａｌｌｏｗｓ）に

１１月１日。土曜日。晴れて３０歳の誕生日だ。わーい。
「先輩、おめでとうございます」
めでたくないよ。３０になったって、お酒やタバコが解禁という訳じゃない。
何の変化もないんだから。ただ本人の意識が変わるだけ。

運転席には一君がいて、あたしは助手席。
どういう訳か、朝イチでたたき起こされると、あたしは助手席に押し込まれてドライブに連れ出された。
後部座席ではドアをすり抜けてきたあの子までついてきている。
二人（いや、三人か？）はそれから、神社、仏閣、さらには教会を巡った。
「幽霊が憑いてるっていうんなら、御祓いですよ。一応、このあたりの有名どころは押さえてありますから、
案内できます。幽霊の一人や二人、誰か御祓いしてくれますよ」

一君の言葉を信じてた訳じゃないけど、結果としてあたしの気分はさらにひどい物になった。
聖職者の皆さんは誰一人として幽霊の少女に気がつかなかったからだ。
少女はすぐそばにいるのにあらぬ方向を指さして、「こちらに悪い気を感じます」とか、
聖水だって十字架だって全然当てずっぽうだし（ってこれ、幽霊に効く物なのか？）。
目の前で少女がふざけた顔してても気がつきもしない。
『ね、こんなのみんなインチキ。見えない人には見えないの、わかった？』
「わかったわよ。最初っから信じてなかったけど、やっぱりねって感じ」
「はあ、すみません。友達とかに聞いて、有望そうなところにしたんですけどね」
あんたの友達ってこんなのが趣味なのか、とは思ったけど、口にはしなかった。
「で、これからどうする気？」
「そうですねえ。後、その友人が言っていたことなんですけど……」
あたしは聞き耳を立てた。少女も興味津々て感じで見つめている。
「先輩のところに現れて、くっついて離れないってことは、先輩に縁のある子じゃないかって」
その言葉で少女の表情が変わった。
一瞬硬直すると、一君の顔をまじまじと見つめている。
「ビンゴ」
あたしは呟いた。
「でもさあ、もしそうだとしてだよ、あたしはこの子に見覚えがないんだけど？どういう縁なんだろう」
少女の仕草に変化が現れた。ふざけた様子が減って、そっぽを向

いたり俯いたりするようになっている。
「先輩はこっちの人じゃないですよね。地方から出てきた人でしょ」
「うん。田舎は2時間ほどかかるところだけど……そっちで縁があるってこと？」
高校卒業まであたしは田舎にいた。山の中の鄙びたところ。
まだ両親はそっちで健在。親戚や友達もいる。それでもその中にこんな子は記憶にない。
でも少女の表情は明らかに変わった。唇を尖らせてあたしをにらみつけている。
「行きましょうよ。先輩の田舎に」
一君の言葉にあたしは驚いた。
「ちょっと何よ、藪から棒に」
「いいじゃないですか。思い立ったが吉日。急がば回れ。先輩の田舎、興味あります」
車のアクセルを踏み込みながら滅茶苦茶なことを言って一君は笑った。
その笑顔を見たら、どういう訳か胸がキュンとした。

高速を降りてから、下道を1時間半。
最近はとんとご無沙汰。その訳は……いまにわかる。
懐かしさと同時に不安もこみ上げてくる。
あたしのそんな気持ちと同調するかのように少女の顔も不安げ。
古里に行くことになってから、あまり口も挟んでこない。
田畑の中、最後の坂道を上ると、あたしの実家。
「あらまあ、よお帰ってきたわねえ」
うひゃあ、いきなりうちの母親だ。そして、恐れていた言葉が、すぐ来た！
「とうとう連れてきたんかねえ。若くていい男やないかね」
違う！って断言したかったけど、説明するのも面倒だったので、そのままにしておいた。

一君は笑顔で適当に話を合わせてくれているようだ。
あたしは自分の部屋を目指した。幽霊の少女もくっついてくる。
久しぶりの部屋の中、目的のアルバムを見つけて開く。
顔なじみが懐かしい笑顔で出迎えてくれた。
「……違う。これも違う。いや、そもそもみんなまだ生きてる。幽霊の訳がない」
あたしの目の前に座っている少女が笑った。
『まだまだあたしにたどり着けないみたいね。いいよ、いつまでも憑いててあげるから』
「うるさいっ！」

アルバムと名簿を持って、あたしは車に乗り込んだ。
うちの親と談笑していた一君が慌てて駆け込んでくる。
「もっとゆっくりしてけばいいのに」
いつの間にか、父親も出てきてそんな声をかけていく中、あたし達は車を出した。
「愛美にも挨拶していけばいいのに」
「父ちゃん、まだ早いよ。仁美もやっとここまできたのに」
そんな両親の会話は、車の音であたしの耳には入ってこなかった。

運転する一君の口には干し芋。どうやらうちの母親にもらったらしい。
「これ、結構おいしいですよ」
そうだよね、あたしも子供の頃、毎日のおやつ代わりに食べてたよ。
あれ？子供の頃……。なんかが、ひっかかった。
あたしは携帯を取り出すと、名簿の中から何人かに電話した。
そのほとんどは結婚して、違うところに住んでいたりしたけど、親切にもそちらの電話番号を教えてくれる。
挨拶、近況報告。結婚して、出産して、ああ、みんな幸せなんです

ねえ……。
いえ、そっちじゃなくて、身近のご不幸、なにか知りませんか？
結局、祖父母クラスのご不幸（それすら知りませんでした。ご無沙汰ばかりで申し訳ありません。
落ち着きましたら、ご挨拶に伺います！）はあったけど、あたしの知ってる若い世代では皆無だった。
電話疲れであたしはぐったりと椅子に沈み込んだ。
徒労に終わったという疲れもあったけど。
そんなあたしを見て、一君は干し芋を差し出してくる。
口に放り込んでから、ふと気になった。
「あんた、ずーっと食ってないかい？」
一君は干し芋でいっぱいになったレジ袋を見せてくれた。
うちの親も親だ、もうちょっといい物を渡せばいいのに。
「いいっすよ。先輩。これ、おいしいですから」
安上がりの一君でよかった。涙がちょちょぎれそうだよ。もう。

「結局、わからなかったんですね」
「うん。近くまで入ったような気がするけど、空振りだ」
秋晴れのいい天気。涼しげな風がながれている。その風に乗って飛んでいるトンボ。遠くで揺れる稲穂。
北の山々が白くなれば、このあたりにも初氷と初雪の季節。
昔と変わってない。小さな頃に見た景色と同じ。
「お墓行ってみましょうか」
なにげなさそうに、一君が呟いた。
「え？」
「菩提寺にお願いして、過去帳見せてもらえれば何かわかるかもしれませんよ」
思っても見ない一言だった。そうか、そんな手があるんだ。一君、なかなかやるじゃないの。
「よし、言ってみよう」

あたしがそう叫んだときだった。二人の携帯がほぼ同時に鳴り出した。
慌てて取り出して耳に当てる。そして、叫んだ言葉も同じだった。
「火事！？」

急いで我が家、っていっても会社の独身寮だけど、に戻った。
あまりに急いだので、高速で接触事故を起こしかけたけど、それは本題とは関係ないから。
着いたときには、会社の人間がたくさん集まっていた。
火事そのものはぼや程度で消防署を呼ぶまでもなく、消火器で鎮火できたらしい。
ただ、その原因にみんなが首をひねっていた。
火元はあたしの部屋。しかも火の気のないゴミ箱がくすぶっていたことに感知器が反応したらしい。
「仁美さんはタバコも吸わないし、鍵のかかった誰もいない部屋でどうやってゴミ箱が燃えたのかわからない」
それがみんなの意見だった。
あたしがそれを聞いたとき、（あんにゃろがやりゃあがったな）と思った。
そう言えば実家を出てからしばらく姿を見ていなかった。
あいつなら壁抜けも瞬間移動みたいなことも、ゴミに火をつけることぐらいできるだろう。
会社のみんなに「ご迷惑かけました」と平謝りした。内心は怒りでいっぱいだったけど。
一君にもよくお礼を言った。一君は「後で顔出しますから」と言っていた。
あたしはろくな返事もしないで部屋に入ると、あいつを呼び出した。

ぼやの後、掃除されていて痕跡もない。ただ、消火器の泡の臭いが少しするぐらい。

その部屋の中に、あの子が腕組みして立っていた。
「お前だろ、犯人は」
幽霊の少女は知らん顔してる。でも、だいたいこいつの性格がわかってきた。
自分の都合の悪いことには返事をしない。つまり、返事のないことがこいつの肯定だ。
「火事なんか出したら、みんなに迷惑じゃないか。どういうつもりだ！」
あたしの方をキッと睨み付ける。普通なら怯んだかも知れないけど、今のあたしは怒り全開モードだ。
「どういう理由であたしに憑き纏っているのか知らないけど、あたしだけにしなよ。火事は余計だ！」
『だってあのタイミングじゃまずいんだもん』
そっぽを向いたまま返事が返ってきた。
「なんだ、タイミングって」
『言えない。時期じゃなかったってこと』
この返事にあたしの怒りは頂点に達した。机でも何でもいいから投げつけてやる！
「いい加減にしろ！もう我慢できない！」
『あたしだって我慢しまくってたんだから！』
その声にあたしの怒りは凍り付いた。こっちを向いた顔は……泣いてる？
『あたしだって何回も辛いって言ったのに、無視してばかり。そんなことも全部忘れちゃったんだろう！』
ちょ、ちょっと、あんた、何を言っている？
『あたしのことも全部忘れて飛び出していったじゃないの。あたしは寂しくてしょうがないんだから！』
待て、こいつは、この子は、あたしにすごく近い……
頭の中が混乱してきたとき、ナイスタイミングでドアがノックされた。

開けるとそこには一君。手にはワインのボトル。
「ちょっとコンビニで買ってきました。安物ですけど」
あたしの手に瓶を押しつけると、さらに箱を取り出す。
「♪ハッピーバースデー、先輩」
調子っぱずれの歌と一緒に渡された。箱から漏れてくる甘い匂いにケーキと推測する。
思わずホロッとしてしまった。（くそ、３０だぞ！）
強がり言っても、誕生日を祝ってくれるのは嬉しい。たとえそれが三十路の独身女でも。
一君がワイングラスを並べて、ケーキを切る。それぞれ三つあることにあたしは気がついた。
「あたし達、二人じゃん。誰かくるの？」
「先輩のそばには、霊の幽霊さんがいるんでしょ。彼女の分ですよ」
今までベッドのところでべそをかいていた彼女は、その言葉を聞いて、飛び降りてきた。
テーブルの横にちょこんと座ると、じっと一君を見つめている。
もちろん、その様子は彼には見えないけど、あたしが伝えてあげる。
彼は笑いながら、彼女の分のワインとケーキを置いた。
「幽霊だよ。幽霊にケーキなんかいるの？」あたしの言葉に彼女は睨み付けてくる。
「いいじゃないですか。お祝いはたくさんいた方がいいでしょう」
ワイングラスで乾杯。持てなくもないけど、持ちたくなさそうな彼女のためにテーブルの上のグラスにあわせてあげる。
『うくっ、う、う』
変な声にあたしはケーキをほおばったまま、彼女を見た。顔をクシャクシャにして泣いている。
『こんな、優しくされたの、死んでからも、その前でもあんまりなかったから』
そう言って泣いている。

さっきまでぶち殺そうとまで思っていたあたしも、ついもらい泣きしそうになる。
その有様を聞いた一君ですら、涙目状態。
「おめでたい日なんですから、泣いてないで、みんなで楽しくやりましょう」
一君、お前って案外いいやつだなあ。
いつの間にか空になったワインの替わりに、あたしの秘蔵のお酒も、一君の部屋のお酒も飲んだ。
二人、いや三人で思いっきり騒いでいたような気がする。
いつ終わったのやら、全然わからないまま、あたしは眠ってしまったようだ。

3．死者の日の朝に

朝だ。いつの間にベッドで寝てたんだろう。昨日の騒ぎ、まるでウソみたいだ。
そう思いながら、ベッドから出ようとしたあたしは青ざめた。
シーツの中は、すっぽんぽんだった。急いでシーツを身に纏って、あたしは思い出そうとした。
うわぁ、いったい昨日の夜、何をしたんだ？
飲んで喰ってはしゃいで、ああ、一君とも凄くスキンシップしたような……
一君に思いっきり迫ったような気がする。これは、間違いなく、……
「安全日、だよねえ？」あたしは呟いた。

ちょっとしたショックからようやく立ち直って、あたしが着替えた頃、
外の駐車場で聞き慣れたエンジン音がして、車が止まった。
（一君、どっか出掛けてたんだ）そう思ったとき、ドアが叩かれる。
「開いてるよ」

あたしの声が消えないうちに、一君が部屋に飛び込んできた。
「先輩、ヒント、ヒントがありましたよ。実は先輩の……ぐえええっ！」
いきなり一君のネクタイが宙に飛び出すと、思いっきり締め上げている。
目を凝らすと、やっぱりあいつだ！
「止めろ、止めて！」あたしはネクタイに飛びかかった。

『ダメなの、自分で見つけて欲しいから。一さん、しゃべっちゃうところだったの』
ようやく引きはがした少女がそう呟いている。
「ほら、一、少しは幽霊を信じた？」
あたしは喘ぎながら、一君に言った。
「うーん、首が苦しかったのは事実として認めます。この原因が幽霊かはわかりませんが、不思議なことがあるのは事実ですね」
首の周りを手で撫でながら、一はぬかしてる。
幽霊の言葉を伝えると、一君は肯いている。
「また、首を絞められるのはイヤですから、先輩にはヒントだけ。先輩は……、一人っ子ですか？」
「あたしは、」そこで絶句した。

あの懐かしい風景の中、あたしの隣に小さな子がいた。
田圃の中でも、稲刈りの中でも、雪だるまの横にも、かならず小さな女の子がいた。
いつもいつもニコニコして、あたしにじゃれついて、時には鬱陶しくなるぐらい、側にいた。
一緒に干しいもモグモグやってた。
でも、その子は記憶から急に消える。
なぜだ。そしてどうしてそのことにあたしは気がついてなかった？
あたしは幽霊の少女を見た。彼女はベッドの上からあたしをじっと

見てる。
そうだ、あの日もこんな感じで見られてた。そして、彼女は……
「自殺したんだ」
　学校でのいろんな噂は聞いていたし、ボロボロの格好だったり、髪の毛がくしゃくしゃだったり、なにかあるなってのは分かっていたけど、そんなに酷いなんて思ってなかった。
ヘタに助けたり、手出しすると、こっちにまで矛先が来るかなって思ったのも確か。
だから見て見ぬふりして、結局、何の助けも出来なかった。
そしてある日、彼女は消えた。
　助けてあげられなかった。そればかり考えてた。
いろんなサインを出していただろうに。あたしはそれに気がつかなかった。
いえ、気付いても知らん顔してた。
なにかやってあげられただろうに。どうして、無視してたんだろう。
　あたしはそうやって自分を責めた。苦しめた。苦しくて、苦しくて、思い出さないようにした。
全部を彼方に封じ込めた。
そして彼女に関すること全てを忘れた。

「会社の人事の奴に、こっそりと先輩の戸籍の写し、見せてもらったんですよ」
そのために干しいもが絶大な効果を発揮したそうだ。
　なるほどね。それなら載ってるよね。あたしの妹。
つまり、この幽霊はあたしの妹なのか。でも、それにしては大きいぞ。
確か小学生だったぞ、妹は。
『うん、でもお姉ちゃんぐらいになりたいと思ったら、このサイズ

だったの』
　そっか、幽霊って便利だね。
でも、どうして今出てくる気になったの。あたしに恨み辛みを言いたくて出てきたの？
『自殺のことはどうでもいいよ。恨みなんかないよ。今にして思えば、あんなことしなきゃよかったって後悔してる。でも、お姉ちゃんにこのまま忘れられちゃうのが寂しくて。あたしのこと、何とかして思い出して欲しかったの』
　ごめんね。ホントにゴメンね。これからは一緒にいようよ。
『あ、それダメ。幽霊ってそもそもそんなにしょっちゅう出てくるもんじゃないでしょ。
今でさえ結構、力使ってるんだから。もうそろそろ消えちゃうことになりそうなの』
　あたしは幽霊、いえ、妹の言葉に驚いた。そりゃ、幽霊は消えるものだけど。
「ちょ、ちょっと。もっといっぱい話そうよ。姉妹水入らずで」
『ごめんね、お姉ちゃん。でも一さんをしっかり捕まえておけば、後でいっぱい話せるから。もうそろそろいくね。一さんにもありがとうって、伝えてね』
　妹はそう言って立ち上がると、ふわっと消えた。
どれだけあたしが呼びかけても、もう二度と現れなかった。
泣き叫ぶあたしを、一君が抱きしめてくれた。

☆　　☆　　☆

　あたし、いえ、あたし達が経験した不思議な話はこれで終わり。
だけど、一応、後日談。
　落ち着いてから、あたしは一君を問いつめた。
「昨夜、どこまでいったの？最後までいったの！？」
　一君は最初、言葉を濁していたけど、とうとう最後までいったと

白状した。
まあ、そう思っていた。据え膳喰わぬは武士の恥だもんね。そりゃ最後まで行くのが男ってもんでしょうよ。
で、あたしも正直に一君に言っておいた。
「危険日ど真ん中。覚悟しておいてね」
まあ、その時の奴の顔って言ったら。写真撮っておけばよかったなあ。
で、兆候が出て医者に言ったら「おめでたです」だってさ。
このときはホッとしたのと、覚悟をしっかり決めた日になった。
「堕ろさない。生む」あたしは一君にこう宣言した。
一君が何て言うかわかんなかったけど、シングルマザーだっていい、そう思ってた。
でも、彼は一言。
「責任取ります」だった。
もうそれからはバタバタ。両方の親への挨拶。
（うちの親は何を聞いてもニコニコだった。そりゃ嫁き遅れ気味の娘が片づくんだもんねえ。
一君の親は最初引きつった笑顔だった。特にできちゃった婚って聞かされた時はね。
でも、孫という言葉ではデレデレになって、最後、「大切にしてね」って言われた）
会社への挨拶、式場、新居、何もかもがあっという間に過ぎていった。

でも、少しだけ時間が出来ると、あたしはお腹を触りながらこう言うの。
「自分が生まれ変わるためにやってきたんだよね、愛美。
あんたが生まれて大きくなったら、この話、してあげる。
あんた、生まれる前は幽霊としてやってきたんだよって」

（後書き）

ハロウィンの事を調べていたら、３日連続でそれなりの日ということが分かって、そしたら、この話が飛びだしてきました。
で、このタイトルにしてあります。
まあ、内容はベタだと思います。期待してくださった方（いるのか？）
すみません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1902y/

ハロウィンの日に

2011年11月16日12時47分発行